

## 小川未明「海螢」論：李光洙「少年の悲哀」との比較より

河内, 重雄  
北九州市立大学文学部：准教授

<https://doi.org/10.15017/1787566>

---

出版情報：九大日文. 26, pp.67-77, 2015-10-01. 九州大学日本語文学会  
バージョン：  
権利関係：

# 小川未明「海蜩」論

——李光洙「少年の悲哀」との比較より——

KOUCHI  
MUTSUHITO  
KAWA  
河内 重雄

## 一 本稿の狙い

小川未明「海蜩」(以下、本作とする)は、大正十二年八月の『赤い鳥』に掲載された童話である。本作は『赤い鳥』掲載後、『かいさかな』(大正十三年九月、研究社)、『小川未明選集 第六卷』(大正十五年四月、未明選集刊行会)、『未明童話集 第三卷』(昭和三年七月、丸善)などの単行本に収録されている。決して有名な作品ではないが、大人から子供まで、幅広く読んでもらうに足る童話だという作者の自信がうかがえよう。

本作の内容は以下のようなものである。

ある日、兄弟が村のはずれの川から小さなほたるをたくさん捕まえてくる。その中にはひとときよく光る牛ぼたるがいて、空に輝く星を連想させる。次の日、弟が友達に海ぼたるを一匹もらつてくる。普通のほたるより二倍も大きく、色もやや薄く、気味の悪いような感じのするほたるで、兄弟はこれまで見たことも聞いたこともない。兄弟は他のほたると一緒に、海ぼたるを籠の中に入れてやる。

海ぼたるについては、ほとんど知る者のいない次のような話

がある。昔あるところに、美しくおとなしい娘がいた。両親は娘をたいそう可愛がり、娘を可愛がってくれる金持ちのところへ娘を嫁にやりたいと考える。ある日、旅の人がやって来て、自分たちの大尽の息子の嫁にもらいたいと言う。両親は旅の人を疑わず、ついやる気になってしまう。遠い東の山を越えたところへ嫁に行った娘のことを、両親は思い続けるが、娘からは何の便りもない。実は、娘の嫁いだ先は、確かに村の大尽で、舅も姑も娘を可愛がってはくれたが、婿は少し「低能」<sup>(1)</sup>な生まれつきの者であり、その点、娘は旅の人に騙されたのである。婿は娘を慕い、愛したが、娘はどうしても婿を愛することができない。

故郷と両親への恋しさが募る一方の娘は、ある日、婿や家の人たちに気付かれぬよう家を抜け出す。川の流れているところまでやつと落ちのびた娘が丸木橋を渡ると、木が朽ちていたため、橋は二つに折れてしまう。大雨のためか水かさが増しており、川に落ちた娘は溺れ死んでしまう。死んでも魂だけは故郷に帰りたいと思いつながら娘は死に、その夜から、この川にはほたるが出るようになる。

娘に優しくしてきたつもりでいた婿は、娘がいなくなり、たいそう悲しむ。家の人たちが見張っていたにもかかわらず、婿は家を飛び出し、同じ川に身を投げて死んでしまう。婿の水膨れのした死体は川を流れ、海に入り、海ぼたるとなった。

二人の兄弟は、海ぼたるのこのような物語を知らずに、海ぼたるを他のほたると同じ籠に入れたのである。ほたるたちは日

ごと弱り、川のほとりから死んでいき、最後に海ぼたるだけが残る。独り残った海ぼたるは寂しそうに見える。梅雨明け、兄弟は海ぼたるが死んでいるのを発見する。

作品梗概は以上である。兄弟が牛ぼたると海ぼたると同じ籠に入れて飼う話に、娘と「低能」の男が夫婦になる昔話が重ねられている。三人称の語り、固有名は一切出てこない。

小川未明には『白痴』（大正二年三月 文影堂書店）という単行本があるが、知的障害者を主要な登場人物とする小説がある。

「白痴の女」（『新潮』大正六年八月）がそれである。この小説では「白痴者」の幸不幸や自殺がテーマの一つとなっている。本作でも「低能」の婿の幸不幸や自殺が一要素となっており、作者の知的障害者問題への関心がうかがえよう。

本稿では、李光洙「少年の悲哀」（『青春』一九一七年六月）と比較することで、本作からどのようなことを読み取ることができているかを検討する。作家の知名度が高いこともあり、「少年の悲哀」は、韓国では比較的広く知られている小説である。無論、本作と「少年の悲哀」は典拠の関係にはない。しかし、次章で詳しく紹介するが、「少年の悲哀」には、「白痴」の男と結婚することに、不幸に嘆く美しい娘が出てくるなど、本作と共通する要素がいくつも見られる。「少年の悲哀」と比較することで、本作だけ見ても注目しにくい箇所に注目できるように考えると考える。

## 二 「少年の悲哀」について

「少年の悲哀」は全六章からなる短編小説である。全訳を載せることができないため、以下、内容を詳しく紹介する。

美しく才能ある処女・蘭秀には文浩という従兄がいる。文浩は従妹たちの中でも特に蘭秀を愛している。文浩は十八歳。中等程度の学校の青年で、少年と自称している。感情的で成績優秀。まだ女をしらない。姉妹たちと話をし、笑わせるのが好きで、姉妹たちから愛されている。

土日に彼が家に帰ってくると、村中の姉妹たちが集まってくる。彼の帰りが遅いと、幼い蘭秀などの女の子が、村の前の峠で見張りをする。文浩が帰ってくるのが見えると、蘭秀は急いで姉妹たちに伝える。それを聞いて喜ぶ者もいれば、これまでに蘭秀が嘘をついたことがあったため、嘘ではないかと怪しむ者もいる。文浩を出迎える時、幼い子は抱き付き、年頃の従妹たちは手に触れて退いたりする。蘭秀も去年までは文浩の手にしがみついていたが、今年からは手を少し握って赤くなつて逃げるようになった。室内で座る時も、幼い子ほど文浩の近くに座る。以前は抱き合ったりしていた姉妹たちとの間に距離ができるのを見て、文浩は悲しむ。

文浩の母は一門でも賢叔な人として有名で、文浩は母と蘭秀の母（叔母）を最も敬愛している。文浩には芝秀という妹がいるが、妹よりも蘭秀の方をより愛している。文浩には文海という従弟がいる。容貌や拳動はそっくりだが、文浩と違い、冷静

で理論的である。二人はお互いを愛しているが、文海は文浩の感情的なところを嫌っている。

文浩が家に帰つてくると、文浩の母は文浩や姉妹たちに餅や鶏の料理をふるまう。食後、文浩と文海は、中国や西洋の偉人について議論をする。文浩は李白や王昌齡、トルストイ、シェークスピア、ゲーテなどを称賛する。しかし、文海はそれらの人を無益な懶惰者だと罵倒し、孔孟朱子、ソクラテス、ワシントンなどを称賛する。文浩は芸術至上主義的で、文海は文学を社会を教化する方便と考えている。

文浩の家は裕福で、代々優れた文章家を輩出している。昔は女子たちも四書などを読んでいたが、近年はハンゲルで書かれた国文学すら理解できない女子がいる有り様である。

文浩は蘭秀に詩人の素質があると信じている。文浩に歌や詩を読んでもらうと、蘭秀はそれらを楽しみ、すぐに暗誦し、幼稚ではあるが批評も加える。文浩の妹の芝秀は蘭秀と同年で、才能もあるが、文浩の見るところ、蘭秀ほど美を感受する力が鋭敏ではない。芝秀は文海と同じタイプの人間で、理論的で落ち着いており、兄の文浩よりも文海をより愛している。

蘭秀の姉の恵秀は、文学では村の青年女子界において最先端の学者である。文浩たちの門中に国文小説を流行らせたとしたのは、文浩の姑母（父の姉妹）にあたる人。門中で尊敬されている文浩の祖母が年をとって小説を好むようになったため、国文学は文浩の一門の女子界に次第に浸透していった。文浩の姑母が死に、恵秀が一昨年嫁に行ったため、現在は蘭秀と芝秀が文学界のト

ップを争っている。文浩は蘭秀に勉強をさせようとするが、女に学問は不要だと言つて、蘭秀の父がさせない。文海は冷静で情熱がなく、父母の命令に服従する美質があるため、蘭秀に勉強をさせる気はあまりない。蘭秀も勉強が何なのかよく分かっていないため、両親にさせてくれと頼むことはない。

秋に十六歳になる蘭秀は、某富家の十五歳になる子弟と婚約する。文浩は父たちにやめるよう言うが聞き入れられない。文浩は蘭秀に嫁に行きたくないと言うよう説得しようとする。しかし、新郎となる者の顔を見てみたい、抱かれてみたいと思う蘭秀は耳をかさない。文浩は、才能ある詩人が結婚して朽ちてしまうことを、最も愛する妹を他人に奪われることを嘆く。

しばらくして、新郎が「白痴」だという噂が聞こえてくる。文浩の父が新郎を見に行き、「少し愚鈍のようだが、その方が福がある。」と報告、婚姻は確定される。が、小耳にはさんだところによると、新郎は三日かけても論語の一行すらも覚えられないとか、鼻水や涎を垂らし、目上の者に「あんた」、「お前」、「俺」といった口のきき方をするとか、脈絡のない行動をとるとか、目玉は白目だけで黒目がないとか、さらには生殖器の機能を失っているという噂まで聞こえてくる。文浩の祖母や叔母は婚約したことを悔やみ、蘭秀も文浩の言う通りにしなかったことを後悔する。文浩は蘭秀の父に諫言するが、両班（朝鮮時代の貴族階級）の家柄で一度許諾したことは取り消せないと囁かれる。両班の面子よりも人一人の一生の方が大事だと文浩は反論するが、蘭秀の父は聞き入れない。文浩は両班の面子なるも

のを憎み、蘭秀の父の無知と無情を恨む。

婚姻の日、人々が酔つ払つて楽しんで座っているなか、文浩は一人、不愉快げに座っている。文浩の隣にやつて来た蘭秀の目には、絶望と諦めが見える。その美貌と才能で「白痴」の妻になるとは胸が痛い、「白痴」の新郎が憎いと思う文浩。やがて新郎がやつて来たが、迎えた一同は皆がっかりして顔をそらす。実際に見ると噂以上にひどい。顔は馬鹿でかく、真っ赤な顔が縦に長い。大きな目は牛のようで、大きな口は開けたままで涎を垂らしている。両家の家族はみな落胆して座り、文浩は蘭秀を見て改めて涙を流す。蘭秀も文浩の背中に顔を押し当てて泣く。蘭秀の姉の恵秀は、こんなめでたい日になぜ泣くのかと、蘭秀を慰める。蘭秀は心中、恵秀の夫を羨む。恵秀の夫はハンサムでおとなしい人である。蘭秀が期待していた新郎は、恵秀の夫や文浩、文浩のような者であった。

婚姻の日の夜、どこからかお金を工面してきた文浩は、一緒にソウルに逃亡しようと蘭秀に持ち掛ける。しかし、それだけはしてはいけないと、蘭秀は応じない。文浩は蘭秀を叱りつけ、別の部屋で一人横になる。恵秀の夫が部屋に入ってきて、文浩の傍で横になる。「白痴」の新郎に餅を勧めたところ、食べたくないと言って膳を蹴飛ばしたため、ズボンに汗がついたと言つて、恵秀の夫は文浩に濡れたズボンを見せて笑う。文浩も、新郎が牛のような目玉を白黒させて膳を蹴飛ばす姿を想像して笑う。

翌朝、蘭秀の父の家で文浩は、シルクの服を着て髪をかき上

げて座っている蘭秀を見る。蘭秀は文浩から顔をそらす。文浩は、蘭秀が「白痴」に処女を奪われたのかと考え、悲哀と嫌悪を覚える。可愛く才能ある処女をどうして「白痴」の前に投げ出し、踏みつけられるようにするのかと文浩は思い、部屋を出入りする人々を憎む。文浩にとつて蘭秀はもはや死者である。愚痴をこぼしたような顔の文浩を見て、妹の芝秀は文浩に部屋から出て行くよう言う。文浩はせめて芝秀だけでも蘭秀と同じ目にあわせないようにしようと思う。

部屋を出た文浩は、恵秀の夫と「白痴」の新郎のいる部屋に入る。恵秀の夫が新郎に朝食は食べたかと挨拶すると、新郎は涎を垂らしながら「へえ。」と言つて笑う。新郎の妻従兄だと言つて文浩を紹介された「白痴」の新郎は、相変わらず涎を垂らしたまま、ただ「妻従兄？」とだけ言い、文浩の顔を見る。その目が死んだ牛の目玉のように見えたため、文浩は吐き気がして顔をそらし、あれが俺の蘭秀の配偶者かと思う。

翌年の春、東京に留学に行つた文浩は二年後に帰つてきた。姉妹たちが文浩を迎えてくれるが、かつてのような親しみや楽しさは永遠に失われている。そのことに泣きたかったが、涙も出ない。母親が幼児を二人、文浩と文浩の前に置く。文浩にはどちらが我が子か分からない。文浩は自嘲気味に、「ふん、僕らももう父親だよ。少年の天国は永遠に過ぎ去ってしまったな。」と笑いながらも、その目には涙がこもる。

以上が「少年の悲哀」の内容紹介である。醜く、礼も徳もない「白痴」の男と結婚することになった、美しく才能ある娘の

絶望。そして、蘭秀の才と美貌を惜しむ少年・文浩の情熱と、成長によるその喪失が、小説の大柱をなしていると言えようか。

小説内容について少し補足しておきたい。まず蘭秀たちが婚約を破棄できなかったことについてだが、これは蘭秀の父が言うように、両家の家柄が大きな理由と考えられる。破婚になってしまうと、家の対外的な面子や信用が失われ、噂される恥ずかしさに耐えねばならなくなってしまう。婚約相手が結婚前に亡くなっても娘を嫁に行かせたりするのはそのためだ。約束を破棄することや婚約相手を変えることは、当時の朝鮮の儒教的な価値観からすると、主君を裏切り、他の君主に従うような行動と同じとみなされてしまう。文浩は一時の面子よりも人の人生だと言うが、一時の面子ですむほど軽いものではあるまい。

次に、蘭秀と新郎との間の子供についてだが、男の子が生まれた場合は、子供の教育は新郎の家の祖父があたることになると考えられる。小説が発表された一九一七年頃の朝鮮の両班は、新たな支配者である日本に協力した一部を除けば、潰れるか、現状維持が精一杯という状態にある。「白痴」の新郎の家は裕福と噂されてはいるが、位の高い中央の権門勢家や地方の豪族クラスではなく、せいぜい地方の中・下級武士の家柄と解せられる。財力にもよるが、乳母がいるのであれば乳母が、いなければ蘭秀が、子育てを担当することになる。女の子が生まれた場合は、蘭秀は男子出産のために尽力することになる。二人の間に子供ができない場合は、蘭秀は姑の嫁いびりに耐えながら、台所で下女たちと共に冷や飯を食べて、一生家事をするこ

とになる。新郎には生殖機能がないというから、蘭秀の残りの人生は家事に費やされることになる予想される。

文浩は、「白痴」の男との結婚により、蘭秀の才能が無駄になることを嘆いている。仮に男の子が生まれても、教育は蘭秀の担当ではないため、才能はほとんど生かされることはない。子供ができない場合は、文学の才能は全く必要とされない。いずれにせよ、文浩の嘆きはこのような当時の習慣と関わっていると見えよう。

最後に、新郎の「白痴」についてだが、小説の記述から病名を特定することはできなかった。顔に関する奇形的な描写や、低い知能などの設定からの特定は不可能であろう。生殖器の問題や目に関する異常に注目すれば、ダウン症や先天性脳水腫などが考えられる。後者の場合、頭部が著しく大きくなるという特徴もあり、小説における新郎の設定に比較的近い。病名が特定されれば、悖徳病（道徳性の欠如）など、その病に附随する様々な要素も解釈に用いることができようが、この小説については、特定は難しいと思われる。

小説のタイトルに注目すれば、「悲哀」というのは、蘭秀の美と才能が美点の見つからぬ「白痴」の男との結婚で朽ち果ててしまうことへの文浩の嘆きを指している。家の面子へのこだわりや、その基となる伝統的な価値基準への批判も、この悲哀に関わっている。家柄の重視や女性蔑視といった伝統的な価値観と、個人の尊重といった新しい考え方の衝突と解せば、日本における封建制度と近代的自我の衝突に似た事態と言えよう。

か。「少年」から大人（父親）へと成長することで、文浩は悲哀をいだかなくなる訳だが、それは伝統的価値観への順応をも意味している。

本作でも結婚が語られているが、「少年の悲哀」のような新旧の価値観の衝突は見られない。本作では、仲介者を立てて親同士が結婚を決めるという、結婚制度自体は従来通りのものである。しかし、勝手に嫁が実家に帰ることによる不名誉など、従来の価値観は一切語られておらず、夫婦間で愛情をもてるか否かだけが問題になっており、旧制度と近代的な価値観（愛に基づく結婚）は衝突せずに共存している。つまり、一見古い装いをしてはいるが、中身は近代的な価値観そのものと言える。このことは本作全体を解釈する上で重要と考える。

以下、「少年の悲哀」と比較しつつ、本作を解釈していく。

### 三 大正期の「低能」観

本作と比較可能な「少年の悲哀」の描写・設定については、次のようなものがある。

- ① 「白痴」の新郎の外見や性質に関する描写・記述
  - ② 「少年の悲哀」には文浩や蘭秀など固有名が出てくる点
  - ③ 結婚を決めた親に対する批判が見られる点
  - ④ 蘭秀が「白痴」の新郎に踏みつけられるようなイメージ
  - ⑤ 前述の新旧の価値観の衝突
- 以上五点について、本作ではどのようなようになっていであろう

か。本章では①、②、③に関して、順に確認していこうと思う。まず①婿の描写についてだが、「少年の悲哀」では、巨大な頭部、赤く縦に長い顔、牛を思わせる大きな目、いつも涎を垂らしている開きっぱなしの大きな口など、一見して「白痴」と分かるものとなっている。本作では婿の外見についての描写はない。しかし、次のような語りから、婿の外見について想像することは可能かと思われる。

さつそく、兄は、弟のそばにいつて、紙袋に包んだ海ぼたるをのぞいてみました。それは、普通のほたるよりも大きさが二倍もあつて、頭には、二つの赤い点がついていました。色が、ややうすかつたのであります。（略）

また、舅も、姑も、かわいがつてはくれましたけれど、婿という人は、すこし低能な生まれつきであることがわかりました。（略）

この水ぶくれのした死骸は、川の上に浮いて、ふわりふわりと流れて、みんなの知らぬまに、海に入ってしまったのであります。

婿が「低能な生まれつきであることが」娘にはすぐに分かったようだが、このことは何かしら外見的特徴が婿にはあったことを示唆しているよう。婿の生まれ変わりとも言える海ぼたるは、「普通のほたるよりも大きさが二倍もあ」り、二つの赤い

点も薄かったという。これは、婿の頭部が大きく、肥満した体軀で、両目に特徴があつたことを思わせないだろうか。また、美しい娘の死体に関しては記述が一切ないので、婿の死体については、「水ぶくれのした死骸」と本文で言及されている。同じ川で溺れ死んだ娘の水死体について記述がないのは、娘が美しかったからだとするれば、婿の「水ぶくれのした死骸」の記述は、婿の外見が醜いものであつたことを示していよう。頭部が大きく、目に障害のあるケースがあり、「低能」をとまなう先天性脳水腫など、婿の外見は「少年の悲哀」の「白痴者」同様、一見して「低能者」と分かる典型的なものだったのであるまいか。

だとすれば、大正当時の一般的な「低能者」観を、本作の解釈に用いることは可能であろう。実際、「少年の悲哀」には固有名が出てくるが、本作には固有名は出てこない。一般名詞のみである。「少年の悲哀」の「白痴」の新郎の名は出てこないが、その妻に蘭秀という固有名がある以上、「少年の悲哀」の「白痴者」は近代的な「白痴」像<sup>11</sup>一般名詞のレベルはもとより、他ならぬこの人<sup>12</sup>固有名詞レベルでも捉えられるべきである。

本作は童話だから固有名詞が出てこないだけではないか、といった反論もあるかもしれない。例えば、本作が収録されている単行本『あかいさかな』（前掲）では、「二郎の玩具」、「遠くで鳴る雷」、「幸福の鉢」、「青い花の香」、「知らないをばさん」、「解けない謎」、「花と少年」に、二郎、正吉、のぶ子などの固

有名が出てくる。本作に固有名が見られないことは、本作は一般名詞のレベルで解釈する必要があることを示していよう。

「少年の悲哀」のように、固有名のレベルもある場合は、「白痴者」でもこの人はいや、この人となら結婚してもいいといった展開もあり得よう。本作の場合は、「低能者」との結婚は不幸であるといった、一般名詞のレベルでの解釈となると考えられる。

それでは、当時の「低能者」観はどのようなものか。レバートリーという観点から、三宅鉦一『白痴及低能児』（大正三年二月 吐鳳堂書店）を参照すると、次のようなイメージがあつたようである<sup>13</sup>。

斯かる児童は学業を好まず、登校を拒み、従つて学業進まず、同輩より愚なるものとして軽侮嘲弄せられ、尚学を卒へ社会に出づるや何等貢献するところなく、寧ろ社会の妨害、損失を招くもの多し。（略）

翻つて又他の方面より之れを觀察するに近來不良少年又は幼年犯罪者なるものの数は益々激増するの感あり。（略）即ち不良少年の多くには低能者多く、精神病者多からず、健全者は其の半数又は三分一に過ぎざることを知るものなり。（白痴及び低能児の保護又は取扱ひに関する發達梗概と其の現況）

一般的事項に関して記憶乏しきを例とし、又たとへ深く



記憶せるものも之を応用して自己の記憶を利用するの法を欠く、又記憶せることの多くは不必要の点にして入らざることを明らかに、且強く記憶し入用適切なる要点は却つて忘るるもの多し。

斯くて是等児童の言には不信用のこと多く、必要なことを脱し、無関係の他の事実を混じ、無益の偶然的事実を追加補綴すること多し。

又斯かる児童の多くは空漠に日を暮らし、考へなく日を送り、物事に不注意、不熱心、倦易く、根気なく、忘れ易きを常とす。(略)

感情行為は一見殆んど普通なるが如きも自己の肉体的感情、例之飲食其の他の性欲的欲望に對する熱情は頗る熾にして又一般に自我心強きものなり。ために自己を中心として、之れより遠ざかれるものに対しては何等の感興を惹き起さず、平氣にして同情心なきものあり。(略) 又衝動性動作として故なく物を盗み火を弄し、放火し、又家を出て途上に徘徊し、又人に暴行を敢てするものあり。又色情亢進し幼にして長上の婦人を犯し、又小兒乃至動物に猥褻行為を敢てし、又面白さに乗じて悪戯をなし、其の悪戯の巧妙にして己が凶に当れるを見て窃かに快とするものあり。

(略)

又時には感情頗変じ易く、激し易く、而かも刺戟性にして怒り易く、不行儀にして礼を知らず、之れに人道を教ゆるも更に其の効なきものあり。斯かるものは殊に其の道德的

精神發育の乏しきが故に悖徳病(略)の名あり。(白痴及低能兒総論)

社会的に役に立たない。善悪の区別がつかない。自己中心的で欲深い。言うことがその都度変わり、信用できない。やる気も情熱も見られない。このような「低能」観は三宅にのみ限ったことではなく、当時の一般的なイメージであったと言つてよい。「少年の悲哀」の新郎と違い、本作の「低能」の婿には娘への愛情がある。娘も婿が自分を慕っていることは分かっている。しかし、以上のような「低能者」のイメージからすれば、彼の優しき・思いやりが娘に通じていたかは疑わしい。事実、本文には「愚かな聲は(略)できるだけ、やさしく彼女にしたつもりでいました。」といった語りが見られる。彼の娘への熱心さや優しさは、娘には通じていなかったと考えられる。だとすれば、娘は当時の「低能者」のイメージで婿を見て、彼を愛せなかつたと解することも可能ではあるまいか。慕ってくれてはいても、「低能」ゆえに愛せなかつた、ということである。

最後に③についてだが、「少年の悲哀」では、相手をよく調べもせずに蘭秀の結婚を決めた父親と蘭秀の父に対し、文浩が強烈に批判する場面がある。本作の娘と「低能」の男の結婚についてはどうか。明らかに批判とすることが出来るものとしては、次の一文を挙げる事ができる。

娘は、まったく、旅の人にだまされたのでありました。

大尺の息子が「低能」であることを知っていて娘たちにつげなかったことを、「だま」したとしている訳だが、結婚相手が「低能」である場合、それを知らせないことは相手を騙すも同然だ、ということである。言うまでもなく、「だます」は価値判断を含んだ表現で、その行為は間違っている、悪であるという語り手の評価が読み取れる。

また、「少年の悲哀」ほど強烈ではないが、娘の両親への批判も読み取れない訳ではない。

両親は、けっして、相手を疑いませんでした。先方が、金持ちで、なに不自由なく、そして、娘をかわいがつてさへくれればいいと思っていましたので、先方がそんなにいいところであるなら、娘もしあわせだからというので、ついやる気になりました。

「ついで」という表現には、「うっかりしている」といった、浅はかさを非難するようなニュアンスがある。使いのもつてきた美味しそうな話に飛びつき、相手のことをよく調べもせず結婚を決めてしまったことへの柔らかな批判と、解することができる。

そして、このような語り手による批判が見られることから、この結婚は間違っているという語り手の判断を読み取ることができよう。結婚相手が「低能」である場合は、そのことを知ら

された上で結婚するかどうかを決めなければならぬ。お互いが納得した上ででなければ、「低能者」との結婚は認められるべきではない。批判の根底にはこのような考えが横たわっている。そして先に確認したような当時の「低能」観からすれば、このような考えを否定する者はまずいなかったと考えられよう。知的障害者観に変化があったとはいえ、現在もこのような考えが残っているとすれば、百年以上続いている計算になる。

#### 四 近代化によつて生じた新たな事態

さて、次に④について述べる。この点については、これまでとは逆に、本作によつて「少年の悲哀」にもこのようなイメージがあることに気付かされたのだが、「少年の悲哀」には新郎が蘭秀を踏みつける、「白痴」の男・上／蘭秀・下といったイメージがある。これは新郎に優しさが全く見られないことも関係しよう。それに対し、本作では、娘は空の星を連想させる牛ぼたるになり、「低能」の婿は海ぼたるとなつてゐる。娘・空の星・上／婿・海・下と、「少年の悲哀」とは逆である。これは、「低能」の婿に優しさがあつて、婿にとつて娘は高根の花と言ふべき存在であることと関係してゐよう。

ただ、「少年の悲哀」の上下関係と本作の上下関係には次のような違いがある。前者の上下のイメージは、才能ある娘の人生が無駄になることを表す形容表現に過ぎない。それに対し後者のそれは、「低能」の男と美しい娘は絶対に結ばれ得ないと

いうことを示している。空と海、天と地の開きがある。この他にも、結婚後すぐに娘が逃げ出したこと。娘の死体は流れることなく川にとどまり、婿の死体は海に流れ着いたという横の空間的な隔たり。同じほたるに生まれ変わったにもかかわらず、種類も大きさも異なる点など、結ばれ得ないということが幾重にも示されている。

本作では、兄弟は娘と「低能」の婿の昔話を知らなかったと述べられた上で、娘たちの結婚の話が語られている。仮に、死んでも結ばれなかった二人の昔話を兄弟が知っていたとしたら、彼らは気をつかって、牛ぼたると海ぼたると同じ籠には入れなかったのではあるまいか。物語の最後、牛ぼたると一匹だけ残った海ぼたるとが寂しそうだとされている。兄弟が二種類のほたるを籠に入れるという現実には、一つ屋根の下、美しい娘と「低能」の男が夫婦になる昔話が重ねられる。言い換えれば、娘と婿が死んでも結ばれなかったという昔話に、一匹だけ残った海ぼたるとが寂しそうにしている現実が重ねられている。兄弟が知らない話を語り手だけが知っている<sup>6)</sup>という設定も、二者が結ばれ得ないことをより強固にしている。

先に述べたように、娘と婿の結婚の話は昔話の形をとっているが、内容は近代である。新旧の価値観の衝突は見られない。本作の娘は「少年の悲哀」の蘭秀のように、結婚は家と家との結び付きだから、してしまつた以上は諦めようとは考えない。親や家に対し申し訳なく思いながら死ぬ訳でもない。自分は婿を愛せないから故郷に帰りたい、つまり、個人と個人の愛

情による結び付きが結婚においては大切だと考えている。なお、当時の結婚については、小泉和子編『昭和の結婚』<sup>4)</sup>に次のような一節がある。

戦前の花嫁は、家事を完璧にこなしつつ、舅姑・家族に仕え、夫に仕え、なおかつ自分自身の修養までしなければならなかった。嫁ぎ先の家族に忍従することこそが、花嫁の最も大事な心得であり、「凱旋なき出征」と例えられたのもうなずける。(第一章・第二節)

恋愛感情よりも家と家の結びつきに重点がおかれた時代、好きな人と結ばれる幸運などほとんどない。恋は「はしかにかかったような」ものであり、本人の感情よりも、家長の意向や世間との義理が優先されたからである。(第一章・第三節)

大正の中頃になると、自由主義、理想主義、人道主義、自然主義の思想を背景とする「大正デモクラシー」の影響を受け、「旧弊な媒酌結婚（見合い結婚）」を嫌い、恋愛結婚が望ましいとする声が起こるようになった。(第一章・第三節)

河盛（フランス文学者の河盛好蔵―河内注）の言葉どおりなら昭和三〇年代に入つて恋愛はようやく市民権を得たかに思える。しかし、それは都会生活者の場合である。封建時代

の名残が色濃く残る農村社会では、まだ恋愛結婚は認められなかった。(略)

当人どうしの意志や感情はどうであろうとも、両親がいいといえはそれでいい。「村がうるせえから」、つまり、近所や親類の目が光っているから恋愛はできないというのだ。そんな風潮がこの頃の日本にはまだ根強く残っていた。(第一章・第三節)

近代的なのは娘の考え方だけではない。「低能」という概念も同様である。近代以降の医学的な概念で、明治二十年代、三十年代、小学校義務教育が普及するにつれて実体性を帯びていった<sup>5)</sup>。そのニュアンスについては、前掲『白痴及低能児』などに見られるように、まともな人間関係を築けない、社会にとって有害な存在といったものと言えよう。そのため、座敷牢に閉じ込められているようなケースも珍しくはなかった。

近代以降このようなニュアンスや扱いが一般化していった以上、知的障害者であるということは、結婚相手として不適格だということになる。知的障害言説と結婚制度のリンク、結ばれ得ぬ——少なくとも結ばれにくい——組み合わせが新たにできたということである。本作の「低能」の婿には愛情も優しさも

ある。そのような場合、不幸は「低能者」と結婚することになった側だけのものではない。当時の「村」での生活は、実質的に、「低能者」が結婚生活を営むことができないほど複雑なものだったのであろうか。本作から読み取ることができるのは、近代化の思わぬ副産物の一つと言えよう。

#### 【注記】

1 以下、本作の引用は全て『定本小川未明童話全集3』（昭和五十二年一月 講談社）による。本稿における引用文中の傍線は全て筆者によるもので、ルビは省略した。

2 引用に際し、旧漢字は新漢字に、片仮名は平仮名に改めた。

3 本作の本文には、「もちろん、その海ぼたるについて、つぎのような話のあることを知るものは、ほとんどなかったのであります。」とある。「ほとんどなかった」とあるのは、語り手くらいしか知っている者がいないためと考えられよう。

4 平成二十六年十一月、河出書房新社。

5 詳しくは拙著『日本近・現代文学における知的障害者表象』（平成二十四年三月 九州大学出版会）「序章」等を参照。

（北九州市立大学文学部准教授）